

べっふの文化財



由布・鶴見火山群山ろく草原に
多産する大陸系植物のヒゴタイ

別府の自然保護

「美しい海岸生かす」の大見出しで、大分合同新聞土曜インタビュー欄に、別府、大分間10号線拡張の展望ともいべき構想が発表された。別府湾メガロポリス実現を述べたことになる。その動脈ともいべき10号線の拡張で、ショッピング、レジャーセンターを設け、ヘリポートを作り、ハワイ的な楽しい海としたいと結んでいる。最近の別府湾は公害化が進み、そんなに美しい海ではなくなった。しかも拡張工事によって、この間の海は人間の立ち寄り場所を失うことになる。ハワイ的な楽しい海というが、一体何を指してのことであろうか。

近年の開発のテンポからすると、別府湾メガロポリスの実現は着々と進むと想像される、そしてあと数年をまたず、北はゼット機の騒音、南は臨海工業地帯によって汚染された空気と、海のはきだめにおうわれることになる。別府湾メガロポリスとしての性格上、大分市に従属するベッドタウンとして、開発が進み、樹木は倒され、赤茶けた山肌が山腹までつづくことになろう。この状態が名誉ある国際観光都市の近い将来の姿であってはならない。

別府市は温泉郷であった。すぐれた天然現象が別府を育て、今日の国際観光都市として発展させた。この都市化、観光化の長い歩みのなかで自然の育成に一体誰が努力したというのか。恵まれた自然の恩恵をうけながら、これにおぼれ、進歩や発展の美名にかくれて景観を破壊してきたのは近代化の波であった。海岸を埋め立て、白砂は消え、砂湯が失われた。これを郷愁と考えるのは間違いで、別府の価値の消失で、今や別府には美しい海岸はなくなっている。又近代化やレジャーという名のもとに、奥別府の湿原の植物が失われるという。一部の人間のためではなく、人類の真の進歩のために、特性を生かした別府の自然を守り、真の価値を認識しなければならぬ。手おくれになってはならぬのである。

(池田)



別府中央ライオンズクラブ寄贈版

別府市教育委員会
別府市文化財保護委員会

別府の自然

すぐれた別府の景観

年間、9百万人の観光客を迎える別府は、前に瀬戸内海の入海の別府湾、背後には由布・鶴見山群を主峯とする尾根、それに抱かれた扇状地に無数の温泉をもつ山と海の風光を誇る観光温泉都市である。野猿が群生する高崎山が山脚を湾に突き込んで特異な山容が別府の南を限る。

別府のすぐれた景観は、火山活動の歴史にささえられている。この地方の新生代の火山活動は少なくとも4回あって、種々の火山岩と山々を生じた。第一期には実相寺山や亀川西方の丘を、第二期には御越山・福万山を、第三期には立石山・飛岳・水口山・高崎山および高ノ平山を、最後の第四期には由布岳・鶴見岳・ガラン岳などの大きな鐘状火山を形成した。これらは地質学的には山陰系の火山活動で、速見火山区と呼ばれている。

主峯鶴見岳は、その北斜面には爆列火口があり、貞観9年(867)に噴火した記録がある。北に続くガラン岳には爆裂火口や硫気孔が多く、山ろくの塚原温泉や湯山付近には大規模な珪化帯があったが、「別府白土」と称してそのほとんどが採掘されてしまった。

この火山区のマグマの活動は、今日すでにかかなり衰えて活火山は存在しないが、ガラン岳の硫気孔、鉄輪から



▲秋深い志高湖

堀田、乙原にかけての噴気、そして、二つの断層線にそった多量の湧泉が別府温泉をつくる。指定天然記念物である坊主地獄、竜巻地獄の景観や明ばんの鉄明ばん石などの鉱物の生成状態も観察できる。

別府観光港を起点とした九州横断道路は、地獄地帯を突っ切って鶴見岳の南を巻き、奥別府の高原をぬけて湯布院、くじゅう、阿蘇へと続く。鶴見岳頂上の絶景、志高湖畔のたたずまい、城島高原や猪の瀬戸原の詩情は別府への郷愁をいやます。また、鉄輪、明ばん温泉地の旅情、十文字原に広がる蒙古の草原に似たという広大な自然は、別府の景観をいっそう多彩にする。(堀)

緑の自然

別府ほど恵まれた自然環境はないであろう。鶴見火山の山頂帯低木林と山地林の自然林、郊外の広広とした草原、扇状地帯をとりまく緑の樹林。湿原があり、溪谷がある。ゆるやかに傾斜する扇状地には、森が残され、先祖の人々が美しい緑地をつくりあげた。世界に誇る別府温泉の多量の湧出は、こうした緑の自然に包容された天然の恵みである。あらためて、別府の自然の良さ

と恵みを知ることであろう。各種の開発に伴う自然の消滅は未然に防がぬばならないし、生活条件の基盤となる緑の育成に努力をおしんではならないだろう。別府に住む人、訪れる人が、白



市街地の石垣に群生する
ホウライクジャク

然との限りない対話ができる別府をつくりたいものである。一度失なわれた緑の自然をとりもどすことは、決して容易なことではない。

1、関の江砂浜植物群落 別府湾底に残された唯一の砂浜。コウボウムギ・ハマエンドウなど砂浜植物は多種で豊富であるが、荒廃してハマニガナ・ハマボウフウなど消滅寸前の状況にある。

2、温水の淡水生物 湧水池にカワアナゴをはじめ、チチブ・ヨシノボリなど多くの淡水魚やエビの類が生息し、淡水性のモノ類も豊富である。

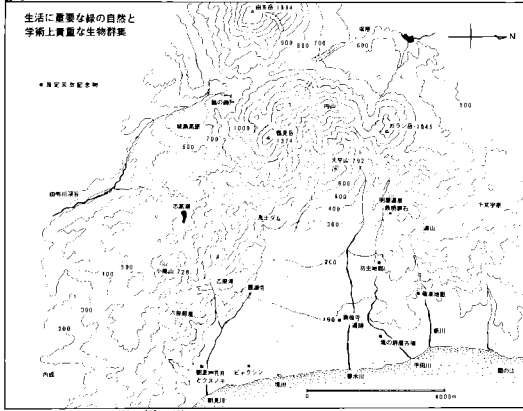
3、上人ヶ浜の潮だまり 築港や埋立で、変ぼうした別府海岸で、唯一の自然状態を残した岩場。カニノテ・イシダタミなど海生動物の生息する自然環境である。

4、上人ヶ浜のクロマツ林とハンノキ林 海岸一帯をおおうクロマツ林に、巨大なハマウド群落はみごとであった。また餅ヶ浜までの海岸線にそって発達した低地湿原の典型的な姿が、トラノハナヒゲ群落やハンノキ林として残存している。

5、新川流域のスタジイ林 新川から血の池地獄の丘

陵地に残存する自然林は、スダジイを主体とし、ヤブツバキ・タブノキなどを含む常緑広葉樹林である。

6、御越山・実相寺山一帯のアラカシ林
何回か伐採され、回復途上にある林で、アラカシ・タブノキ・クロキなどからな



る。急傾斜面の崩壊を防ぎ、泉源のかん養として重要である。

7、別府市街のシダ群落 温泉が流れる住宅街の側溝や石垣べいなどに、ホウライシダやモエジマシダなどが群生している。ともに稀に見るものではあるが、適温と適湿の環境条件のため、よく繁茂している。

8、境川扇状地帯のマツ林 境川がつくる扇状地帯の不安定な地形で、洪水を防ぐために植林されたものである。下草も茂り、出水時の砂防林や泉源のかん養林としての役割を果たしているだけでなく、別府のすばらしい景観の一要素でもあり、生活に欠くことのできない緑地帯である。

9、鉄輪一帯の屋敷森 タブノキ・コジイなどの常緑広葉樹の大木にヤブツバキを多くみる。この地方の自然林を知るうえで貴重な林の姿でもある。

10、火男火売神社のイチイガシ林 春木川扇状地に成立した自然林で、県内でも数少ないイチイガシ林の一つである。

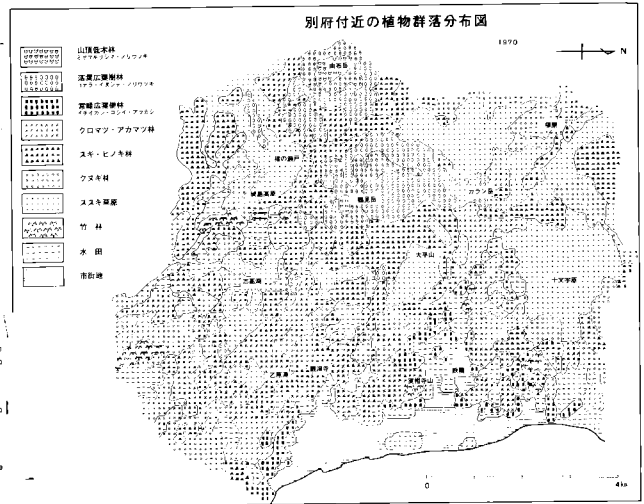
11、鉄輪温泉一帯のコジイ林 地獄地帯をとりまく丘陵地に成立する自然林で、かなり人為が加わっている。

12、湯山の湿地群落 高平山から湧水する小流辺や低湿地にモウセンゴケ・ヤマトキソウ・タヌキモ・コガマなどが群生する。

13、朝見神社のクスノキと神社林 ともに市指定天然記念物。神社林はアラカシを優占種とする自然林である。

14、浜脇・朝見一帯のアラカシ林 回復途上のアラカシ林で、急傾斜した集塊岩層に成立しているため、土砂の崩壊防止のうえから保護育成が必要である。

15、河内溪谷のシダ群落 深く削られた岩壁にシロヤマゼンマイ・クルマシダ・オリズルシダなどシダ植物は種類も多く豊富である。



16、乙原溪谷の生物群集 オニグルミ・フサザクラ・オオバノハチジョウシダなどが、溪谷特有の群落をつくる。ムカシトシボの生息地である。

17、観海寺一帯のコジイ林 温泉地帯の上部に成立する自然林で直径1mにおよぶコジイの大木が丘陵地帯をおおう。

18、鶴見山麓のススキ草原 志高湖付近から城島高原、猪の瀬戸原一帯の草原で、ヒゴタイ・キスミレ・エヒメアヤメなどの大陸系植物は種類も多く豊富である。

19、鶴見権現神社の原生林 アカカシ・イヌシデ・イタヤカエデなどの巨木の下にシキミ・アオキが茂り・サンコウチョウ・ルリ・コマ・キビタキなど野鳥の楽園でもある。

20、猪の瀬戸湿原 山ろく盆地状の地形に発達した山地湿原でサクラソウ・ノハナショウブ・キスゲなど多くの湿原植物を包蔵する。西日本における湿原で典型的なタイプと特殊な群落をつくる。

21、水口山の原生林 イタヤカエデ・イヌシデなどの巨木が林立し、オオキツネノカミソリが地面を飾り、溪谷にはトサチャルメルソウを稀に見ることができる。

22、鶴見岳山頂と鞍戸岳尾根の低木林 ミヤマキリシマ群落やノリウツギ・ベニドウダンなどの低木林は、マイズルソウ・イワカガミなどを含み九州火山山頂帯特有の群落をつくる。

23、鶴見岳・内山一帯の溪谷樹林 イヌシデ・コナラ・ノリウツギなどの落葉広葉樹林は火山地形を安定させ、別府温泉の重要なかん養林である。

24、ガラン岳の山頂草原 ハイデ状草原でミヤマキリシマ群落がつくられる途中の草原群落。マイズルソウ・マンネンネギなどが密生する。

25、杵小野のエヒメアヤメ 十文字原から塚原にいたる一帯のススキ草原はエヒメアヤメの群生地である。

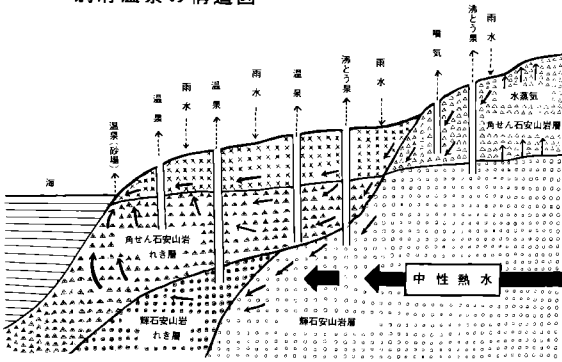
(荒金)

温泉と水資源

別府温泉の底力

明治のころ、流川一帯では、自然に湧き出た温泉に、入湯客もつかり、温泉も川となって流れるという、文字通りの流川であった。当時の記録に昔懐かしい湯の町情緒豊かな姿を偲ぶことができる。田の湯温泉脈地域といわれるこの流川通りは市内でも温泉に恵まれた所で、上水道の完備されない頃は、井戸水が温かく、飲料水に困ったとの話である。この付近の工事で地下水を汲み上げたら、近くの温泉に異変が起こったくらいである。現在地上の流川通りは、さびれ初めたと騒がれてはいても、地下の温泉は鉄輪温泉などと同様に「別府温泉健在なり」である。

別府温泉の構造図



別府温泉と地下水

雨水が地下で熱せられて、温泉水となり、堆積された安山岩地帯の透水層を、別府湾へと流動するうちに、汲み上げられたのが別府温泉である。年平均雨量1873mmの雨水で、1日に4700トンの温泉が湧くと、別府に降った雨の15.4%が温泉として利用されていることになる。

南と北の断層線にある温泉地（旧別府市街、小倉、鉄輪、亀川）の温泉源は朝見川、春木川、平田川、新川の上流の山地で生れた地下水である。

水資源の確保

地形的に上水道用水の水源に乏しかった別府も、最近では利水事業の完成や拡張工事で飲料水の危機は去った感じだが、志高湖の開発や山腹の噴気による泉源の開発、更に後背地の宅地造成には水が不足し、将来の温泉源とともに、解決をせまられている課題である。

湧出量と温泉の種類が豊富なことで世界一の別府温泉ではあるが、最近では乱掘ぎみのため、自噴泉はへり、地下水位は下がる一方で、コンプレッサーによる汲み上げ強行はいろいろな問題を起こしている。温泉源と地下水、そして水資源の確保を真剣に考えねばならぬ時がきている。

水と緑の保護

別府湾の風光美と背後に連なる鶴見由布の景勝は温泉とともに、別府のもつ観光資源である。さる昭和41年

の別府地域利水事業の折、六枚屏風の隧道で多量の地下水を発掘して上水道に利用した。また飲料水として、森林公園付近の湧水を開発した。高地でのこのような地下水は、泉源にとって重大事といわれている。黒土ダムの漏水を残念に思う人はあっても、これが別府南部地帯の貴重な温泉源だと考えている人は少ない。近い将来国東用水が別府の後背地に送水される時が来るだろう。その時こそ泉源地帯の森林の育成や人工池を作るなど、有効に活用して温泉源の確保を図るべきであろう。ふりそぐ日光、緑の森、小鳥のさえずり、水のせせらぎ、こうした自然の保護育成こそ、将来の観光開発のビジョンではなかろうか。（佐藤）

むかしの人々の自然へのはたらきかけ

「豊後風土記」に「赤湯の泉」「玖部理湯の井」とあり、血池地獄や河直（鉄輪）温泉のことが書かれている。この風土記は、奈良時代の編であるから、そのころ、すでに温泉に関心が強かったものと考えられる。また「三代実録」に、貞観9年2月26日の条に、鶴見岳噴火の様子が細かく記録されている。それによると、山頂の三つの黒・赤・青池から大音響を発生し、大小無数の岩石が噴出して、火山灰は数里の間に降ったとある。先年上田の湯南明荘内の工事の際地下3mの位置から弥生式時代の墳墓多数が発見された。上部に堆積した土層は、噴出岩と噴出礫、それに厚く積った火山灰であった。このおびただしい噴出物は、おそらくこの大噴火と、それ以前数回くりかえして活動したときのものと推定される。これらの噴出物は、山ろく扇状地や谷を埋め、全体として平坦で起伏の少ないスロープを形成することになった。

縄文時代には、鶴見山ろくの扇状地や旧溶岩流出の末端部、新しく作られた谷を挟む台地の緑地帯などに集落が営まれた。血池地獄の西南にある野田遺跡(8000年前)は縄文早期の集落である。南石垣の各所に、縄文後晩期(3000年前)の集落が形成されていたが、これらの遺跡から発見される土器は酸化鉄で赤くにごった色調をもっている。これは、この遺跡が湧出する温泉地に立地していたものと推定される。厚く堆積した赤土や黒土の重なりは、火山噴火の堆積によるもので、土器はこの地層の縞模様の中から出土し、当時は鶴見岳の噴火が何回もくりかえされていたと思われる。

過去、長い別府の歴史の中で、火の山鶴見の恐るべき山ノ神は、火男神、火禿神であった。この男女二神は、延喜式内社として春木川の上流、鶴見の「元宮」に祭られた。別府の春秋は、この鶴見の山の神の歴史といってよい。礫原の緑と湧出する温水を求めて人々が集い、山の神にまつわるいろいろな口碑も生まれた。

湯の施薬として使用されると一遍上人門下の念佛聖、湯聖たちの活動が開始された。上人の生地石風呂は、

温泉噴気を利用した蒸湯として登場する。宗教心の厚い近郊の善男善女がこの蒸湯を利用した。信仰と施薬の源としてのいで湯は、太古の昔から幾世代となく続けられたのである。そこには海岸があり展望される鶴見岳があり高原があった。山頂の霧氷、湿原の草花、扇状地の礫原は、海の青さとともに、別府に住んだ人々の価値ある財産であった。

太古からそのいつくしみの中で生き、自然の中で育ててきた人々は、自然にはたらきかけはしたが、自然を破壊することはなかった。(賀川)

開発と自然の保護

別府湾

別府の自然で最も変化の著しい所は、海岸と海である。国際観光港の築港、防潮の埋立、国道の拡幅などと、めまぐるしく開発されていく。この開発のかけに多くの自然を失ってしまった。数百羽のカモメの群れも、クロマツやクロガネモチの美林も、シチメンソウの塩生植物群落も消滅している。情緒豊かな天然砂湯もなくなってしまった。こんなことは開発にとってはあるいは小さいでき事であるかも知れない。しかし小さいでき事への無関心が、かけがえのない自然の破壊へと発展し、人間の生活条件の基盤となる自然を喪失する第一歩となる。建設途上にある臨海工業地帯をひかえる別府湾には、すでに各種の汚染が広がっている。自然の破壊された汚染される海、別府にとって重大事である。

扇状地

今夏の台風9号で、扇状地の海岸付近が水浸しになった。傾斜面に立ち並んだ住宅地や道路に鉄砲水が走ったという。広い扇状地帯に宅地やホテルの造成が進み、せっかく長い年月を経て育てられたマツ林が容赦なく切り倒されていく。降った雨水は、止まることなくどっと海へ流れてしまうのである。別府の美観と生活環境の基盤となる緑地帯は重要な役割をもっている。一本の木も失ってはならないのである。速急に保護区域を設定し、さらに扇山ろくに新しい緑地帯を広げていくことが必要であろう。

鶴見岳とまわりの山々

鶴見岳とそれに連なる山々は、別府の自然の象徴で



宅地の造成で自然の緑が、次々と壊されていく

ある。この山々の深い溪谷は別府温泉の源となっている。別府付近の降水量は決して多くないが、山々や溪谷におおわれた自然林が世界屈指の湧出量をかん養している。新しい鶴見火山は上地的に安定するまでには長い年月が必要である。この山々への開発は、きわめて慎重でなければならない。

奥別府の高原

鶴見岳の山ろくに広がる高原は、都会で緑を失ってしまった人々の憩いの場所である。デパートの中につくられたガーデンで、カブトムシをあがなうような、まやかしの自然でなく、本当の自然に接することのできる高原である。そこにははかりしれない感動と、憩いと、探究を求めることができる。別府の魅力は自然の美しさにあるという。人間が自然に近づいて、対話することのできる営みこそ、奥別府観光開発の指標である。(荒金)

自然を生かした別府へ

自然公園の育成

別府市街地の公園は広くて立派だとはいえないだろう。しかし緑のマツ林があり、コジイやタブ、イチイガシの自然林が残っている。生活に重要な緑の自然と学術上貴重な植物の群集は別府のいたる所に存在している。自然を生かした自然公園の育成こそ、限りのない開発で緑を失ってしまう都市の至宝である。非常災害の時の生命の保全にも重要である。湯の町別府は森の町でもありたい。自然の理解に立った人々の接近の道——それが自然公園への道である。

自然の公園を結ぶ道

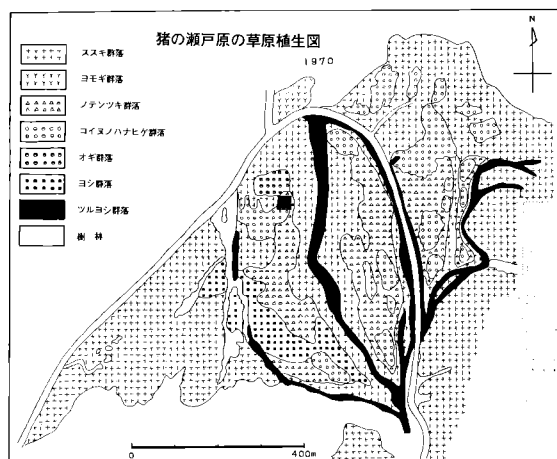
自然と自然との結ぶ道は、志高湖を中心とした草原や植林地に、すでに自然観察遊歩道路として建設されている。志高湖と神楽女、リンゴ園と小鹿山、六枚屏風と乙原の滝、河内溪谷など、それぞれを結ぶ自然の歩道は、人と自然とを近づける。扇山のふもとから鶴見や内山の溪谷、明礬から湯山の高台など、別府には適地が多い。市民も観光客とともに遊歩できる道が必要である。

自然の緑の育成

南国別府の玄関や観光客の往来のはげしい空間に別府の自然に育つ郷土の樹林を育てたいものだ。扇状地に多いクロマツもよい。タブノキやクロガネモチの美林も印象的である。アラカシやヤブツバキもこの土地にあって茂る植物である。扇状地や扇山一帯は、それらが森林になるまで長い時間がかかる。失うことは容易であっても育てることは並大抵のことではない。

物質文化の高度な生活は、自然と人間とを隔離していく。半面、自然へのあこがれは強烈になっていくであろう。自然の生かし方はさまざまであろうが、将来の展望にたった自然の育成こそ、別府の重大な使命であるといえよう。(堀)

猪の瀬戸の湿原



残された仙境

火山と高原が展開する九州横断道路の景観のなかで、由布と鶴見の両火山のふとこに抱かれた猪の瀬戸原ほど、奥深い自然のまっただ中に立つ感慨を覚える所はないであろう。

別府から車でわずか半時間。鶴見岳の裏山の陵線と由布の雄姿をひかえ、水口山の原生林に囲まれた湿原には、生育しつづけてきたサクラソウが湿原をふちどり、ノハナショウブが咲き乱れる。一步湿原に足をふみ入ると、遠い昔からの自然のさまざまなできごとを生い茂げる湿原植物が物語ってくれる。

湿原には道路が貫通し、その利用度は大きい。いくたびかこの湿原を中心とした原野の観光開発が試みられようとしてきたが、かろうじて現在まで大きな破壊から免れてきた。国立公園の中にある仙境—猪の瀬戸湿原—いつまでも残しておきたい自然である。

千古の歴史を秘めて

一つの火山には、生物群集の移りかわりと同じように永い歴史が秘められている。火山活動の一生は、少なくとも千年、あるいは万年の桁で数えられる。由布、鶴見の火山群ができてから、その山ろくに形成された猪の瀬戸湿原は、さまざまな変遷をたどって現在の姿をとどめているのである。

湿原にとっては水条件が最も重要な環境要因である。山すその谷間や扇状地に発達する湿原は、不安定な火山地形が樹林におおわれて安定するまで、大雨のたびに土砂で埋もり、再生をくりかえしてきた自然とのたたかいである。浸食による水位の低下も、冬季の季節風による乾燥も、湿原にとってはきびしい環境条件となる。

湿原は、そこにサクラソウがあるから貴重であるとい

うだけでなく、サクラソウを育ててきた環境こそ重要であり、そこにある自然のでき事をひもといっていくことに意義がある。

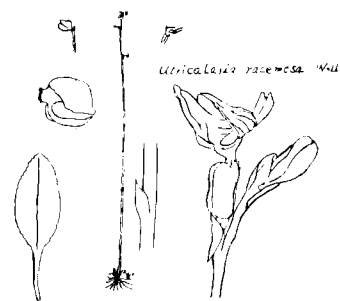
草原植物の豊庫

湿原は、ススキなどの草原植物にとっては浸入しにくい環境である。閉鎖的で、湿地性の植物以外は受け入れない。原のあちこちからしみでてくる湧水の辺りには、小さい湿地帯がモザイク状に分布し、水の流れる凹地、水流辺、低湿地、そして湧水に影響されない小高い所と、変化に富んださまざまな地形をつくり、それぞれ特徴的な植物

が集まる。くじゅうや阿蘇に広がる高原とは比較にならぬほど多様な植物を見ることのできるのは、ススキ草原と湿原の植物の両者が集中しているからである。

湿原には、タニガワスゲ、ヤマアゼスゲ、ゴウソ、ハリガネスゲ、エゾツリスゲなどのスゲの類が多い。同じような仲間には、シカクイ、コシンジュガヤ、ノテンツキ、コイヌノハナヒゲ、イトイヌノハナヒゲ、それにオオイヌノハナヒゲの稀品も産する。これらの植物は湿原植物の群落を区分していくときの重要な識別種となる。食栄養の湧水が浸す湿地には、食虫の植物のモウセンゴケやミミカキグサの類が群生し、広い湿原には、マアザミ、シラビゲソウ、エダウチオグルマなどの西日本の湿原に生育する植物のほか、北国の湿原にみられるサワギキョウやミズオトギリ、ミズナドリなどが安住している。春のサクラソウやミドリヨウラク、夏のオタカラコウ、ハンカイソウ、秋のオギ、エゾミソハギなどは目をひく湿原周辺の植物である。

一方、由布、鶴見火山群のすそ野高原は、キスミレ、エヒメアヤメ、ヒ



ホザキノミミカキグサ
(食虫植物)

ゴタイ、ヒメユリ、キスゲなど、過去に九州が大陸と陸橋で結ばれていたとき、分布域を広めた大陸系の植物を多産する。この地方の草原で誇ってよい植物である。バイカイカリソウ、ハバヤマボクチなどの西日本に偏在する種とともに、猪の瀬戸のススキ草原の構成種となっている。湿原と大陸系の植物を含む猪の瀬戸原は、まさに、草原植物の豊庫である。

湿原植物のまとめり

湿原の植物群落は水の環境条件を軸にして移りかわっていく。水位が下がったり、土砂に埋ったりして乾燥すると、たちまちススキ草原と化してしまう。湿原の植物とススキ草原の植物がいりまじっているような所は、しだいに湿原植物のまとめりが崩れていっているのである。湿原には、古い歴史を秘めて安定したまとめりのある群落や激しく移りかわっている群落がある。

猪の瀬戸原を流れる3支流はツルヨシでおおわれている。これにネコヤナギの低木林が続いていたが、野火のためほとんど消滅してしまった。水流の弱い沼のような所はオタカラコウやタニガワスゲが群生する。サクラソウの群生も水流辺の日当たりのよい所にみられる。

湿原には次のような群落が成立している、

ノテンツキ群落

採草が行なわれるような最も乾燥している湿原で、雨期にだけ湿润化する低平地に分布する。ススキ草原のトダシバやネザサがかなり侵入している。ノテンツキをはじめ、キスゲやノハナショウブ、ウマノアシガタ、タムラソウ、チダケサシなどが特徴的な植物である。

コイヌノハナヒゲ群落

ほとんどススキ草原の侵入をゆるさない湿地をつくる群落で、コイヌノハナヒゲのほか、ヨシ、マアザミ、コバキボウシ、ヒメシロネ、チダケサシ、サワギキョウ、シラヒゲソウなど、西日本の湿原に広く分布する植物があつまっている。

イトイヌノハナヒゲ群落

小流の周辺、食栄養の湧水にかん養される低湿帯に、特異な湿原植物のまとめりをつくる。イトイヌノハナヒゲとシロイヌノヒゲが湿原をおおい、モウセンゴケ、ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、ホザキノミミカキグサがしきつめる。ハリコウガイセキショウ、スイラン、カリマタガヤも特徴的な植物である。

水流辺にはチリメンゴケが密生し、水流にミズシャゴケ、アカバナ、エゾミソハギが群落をつくる。

オギ群落

湿原の上方にオギが群生する。ヒメヤマアザミやチダケサシが下草となる。春には、サクラソウやミドリヨウラクの花をそろえる。

ヨシ群落

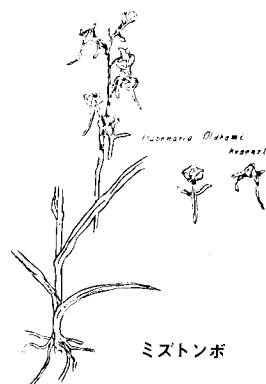
広く西日本の山地湿原にみられるヤマアゼスゲとヨシが結びつく群落で、チゴザサ、マアザミ、エダウチオグルマ、ヤリホゴケ、ミズチドリなど典型的な湿原植物が安定したまとめりを見せる。ミズゴケ類は生育しないが、泥炭様の腐泥や植物の遺体がつもって1mあまりの層がつくられている。

人と湿原との対話

湿原は、そこに自然がつくられてからの歴史を秘めている、植物のフロラがそれを物語り、植物の群落がそれを実証する。また、次々と積っていった遺体の中に、その付近の変遷をたどった植物の花粉化石が埋蔵され、歴史をときほぐす重要な手がかりとなる。湿原が学術上貴重な天然記念物として保護されているのも、湿原が私たちに遠い昔のでき事の多くを語ってくれるからである。

猪の瀬戸の湿原。失ってはならない自然の一つである。

(荒金)



◀ 猪の瀬戸の湿原と水口山の原生林

猪の瀬戸の自然を守ろう!!

自然の探勝地

日本山岳会東九州支部長

野口秋人

猪の瀬戸の保存は絶対に必要である。理由は別府の郊外に自然美をはりめぐらすの一言につきる。大都会から別府へ来た人々の姿は、緑の多い町ですね、と嘆声をあげて、周囲の景色に見入ることである。横断道路のよさは周辺の自然を保護した中を、眺望のよくきく高原をドライブすることにある。そして自然の音楽をかなでさせるのが猪の瀬戸であり、自然探勝路の一級品でもある。自然保護なくして別府は存在し得ないことをよく考えるべきである。



自然のままに 別府女子短期大学 大久保成幸

由布・鶴見の山懐に深く抱かれた横断道路沿いの猪の瀬戸は、四季折々の花と、景観を楽しませてくれる。一歩湿原に足を踏み入れると、学術的に貴重な動植物の宝庫で、フィールドコーチの場でもある。この自然に親しむ絶好の地が破壊されるといふ。海を陸にし、山を消すことも可能な現在でも、一度壊された自然をかえすことは不可能である。美しい自然を背後にひかえてこそ、別府も生きることができる。猪の瀬戸は自然のままにこそ価値がある。

人類の義務

国立療養所石垣原病院 岩尾光子

野を分ける風がすすきの穂を薙けば
銀色の波 一すじにゆらく

昨秋友と城島高原から猪の瀬戸を歩いた時の歌であるが、あの銀色のすすきの原のゆらぎを私は忘れることができない。

人類の発展という大義名分のもとに、大分の海が汚染され、鶴見の山肌をロープウェイでけずられ、このうえ母なる大自然の懐にも似た「猪の瀬戸」!!それを泥足であがりこもうとする人間本位のエゴイズムは許せない。

自然の保護こそ1970年代人類の義務ではなからうか。

あとがき

全国的にみて、土産品が似通ってきている。その土地だけの特産品には魅力がある。

観光地も同じ姿になりやすい。よそをまねずに、別府の地形、温泉、生物、風土などの自然を基盤にした個性にみちた魅力あふれる観光都市にしたい。その第一歩は自然の理解と保護、育成にはじまる。

ぜひ保存を 「厚生省」自然公園指導員 南崎大海

猪の瀬戸の草原は私共がもっている最も身近なところにある美しい、そして唯一の湿原植物と高山植物の宝庫であり憩いの場所でもある。城島高原より猪の瀬戸にいたる緑のスロープに秋ともなれば黄紅色に色づく柏葉の美しさ、そして湿原に咲き残るヒゴタイの薄紫の花の色は、この牧歌的風景を一層忘れがたいものにする。然しこの美しい草原も逐次観光開発の手がびて破壊されようとしている。我々県民の大きな遺産であるこの美しい自然美だけは、ぜひ共保存してゆきたいものである。



破壊するな

大分市上野丘中学校 西田 実

旗の台付近で早春に見る、黄色の花

のフクジュソウは美しく、また枯れ草の中のオキナグサの群落も見事である。猪の瀬戸では、実に見事な春のサクラソウの大群落、可れんなキスミレの花、初夏のヒメユリのつやのある花も忘れがたい。夏のキスゲの香、コオニユリの赤い花、秋のススキの中に伸びたヒゴタイは野原も紫色にするほどだ。

レジャーブームで楽しい施設ができる反面こうした自然が失われる。カラー 슬라이ドや記録でしか残すことができないとは残念だ。失われゆく自然は決して、もとへはかえらない。



別府市文化財保護委員報

発行日 昭和45年10月16日

発行者 別府市立図書館

別府市上田ノ湯町6-37

号数 第2号(特集号)

印刷者 合資会社 興栄社